

展示解説

展示室で掲出している解説文です。改行やルビ、挿入写真・図面、重複する文言などは省略しています。作品解説は、出品目録番号を付けています。解説のない作品もあります。

解説パネル

水を描く障壁画

湯殿書院二之間障壁画「岩浪図」、「岩波禽鳥図」は、寛永11年（1634）の本丸御殿増改築時に制作されました。湯殿書院は御成風呂を備えた将軍休息の間で、家光が座す御成書院（上洛殿）に次いで重要な部屋でした。増築した建物の障壁画は、上洛殿には御用絵師・狩野探幽（1602～74）が描き、その他は狩野杢之助（生歿年不詳）の作であると記録が残っています。杢之助の詳細は未だ明らかになっていませんが、湯殿書院二之間障壁画にみる波の描写が探幽の波涛図とよく似ていることから、杢之助は探幽の描き方を忠実に受け継ぐ絵師であったと考えられます。大画面に波や水景を描く作品は、海の名所の絵画化として古くから好まれてきました。しかし、水は液体であり明確な形をもたないため、一瞬の動きを描くには画家の力量が試されます。あらゆる流派の画家たちは、先行作品の模倣や観察と写生によって、様々に水を描きました。湯殿書院二之間障壁画では、墨線に抑揚をつけながら波の起伏や飛沫が描かれており、その線描による波の躍動感に作品の魅力があります。

水の意匠と描写

波図など水を描く表現は、絵画だけでなく工芸品の意匠にも広く取り入れられました。馬具の「波涛図銀象嵌鍔」（出品番号16）は全面に波涛図を銀象嵌で施します。「波文様火事頭巾」（出品番号17）では、金糸の刺繍で波の輪郭を象ります。水の動きは意匠としても好まれ、銀や金を用いて装飾的にあらわされました。名所風景を描く絵画にも、水の描写が多く見られます。木版画の挿絵をつけた『尾張名所図会 前編』（出品番号18～20）では、穏やかな川の流れ、地形に沿う溪流の動き、荒波と豪雨が描線によってあらわされます。着色画では、水の青で遠近感を表出します。「なごや鯨三題 雪の犬山を望む」では、冬の冷たい海の青、遠くへ行くと徐々に薄くなる色のグラデーションが多色摺りで丁寧にあらわされます。

作品解説

1 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院二之間東側障子腰貼付絵 「岩浪図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

画面の上下や左右端に金雲を配し、波と岩を描いた障壁画です。岩は力強く荒い墨で硬い質感があらわされる一方、波は抑揚のあるなめらかな線で描かれます。

2 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院二之間北側襖絵 「岩波禽鳥図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

金の雲や霞が覆う画面に、波が打ち寄せる岩の上でたたずむ1羽の鳥を描きます。霞の輪郭に金砂子を散らすことで、波の躍動感とは対照的に、繊細で優美な印象を与えます。

3 「龍図」 中条康永筆 江戸時代後期 18～19世紀 名古屋城振興協会蔵

縦約135cmの大きな画面に龍を描きます。渦巻く雲の間から顔を出す龍は、大きな目玉に鋭い牙と爪、針のような毛をもち、迫力のある姿が力強くあらわされます。龍は伝説上の動物で、雨をつかさどる霊獣とされました。その見た目は駱駝の頭、鹿の角、鯉の鱗、鷹の爪など、様々な動物の特徴で表現されます。画面右下の印章より、尾張藩士・中条康永（生年不詳～1824）が本作を描いたとわかります。また、印章には名古屋城天守の金明水（井戸）の水を使用して墨を溶きこれを描いたとあり、伝承が興味深い作品です。

4 「春景青緑山水図」 中林竹溪筆 江戸時代後期 19世紀 名古屋城振興協会蔵

横長の画面に広大な春の山水風景を描きます。山の稜線や樹木の幹の輪郭線はかすれた墨でやや粗く引き、桜や青々と生い茂る葉を点描や細い線で描いています。水辺の人物も細い線で描いており、緻密で丁寧な作品です。画面向かって左では、山間から滝が流れ落ちています。水面に淡く青を塗る一方、滝は着色せず、紙の色をそのままに残して白く清らかに描きます。中林竹溪（1816～67）は京都出身の文人画家です。父は尾張生まれの文人画家中林竹洞（1776～1853）で、竹溪ははじめ父・竹洞の指導を受けて絵を学びました。

7 名古屋城ガラス乾板写真 「御湯殿書院(焼失)南面外観」 昭和 15～16 年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

本丸御殿の南から撮影し、湯殿書院、天守、小天守を一枚に収めています。湯殿書院は本丸御殿の西側、玄関から入って最も奥に位置します。三室と風呂屋、釜屋で構成され、江戸城本丸御殿の湯殿よりも大きかったと伝わります。

8 名古屋城ガラス乾板写真 「御湯殿書院(焼失)東入側北側」 昭和 15～16 年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

湯殿書院の入側（廊下）を写します。長押（柱間の横材）の上には「雪景山水図」が描かれていました。「雪景山水図」は建物とともに焼失しましたが、このような記録をもとに復元模写が制作されました。模写は現在、復元本丸御殿にはめ込まれています。

9 名古屋城ガラス乾板写真 「御湯殿書院御湯殿(焼失)西北側」 和 15～16 年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵

湯殿書院の風呂之間を写します。風呂之間の北裏に釜屋があり、釜屋で沸かした湯の蒸気で蒸し風呂にします。風呂は唐破風屋根付きの豪華な造りです。屋根の下には柘榴口と呼ばれる風呂の出入口があります。

10～12 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿天井画 上洛殿上段之間 「山水図」「山水図」「山水図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

上洛殿は、3代将軍・徳川家光を迎えるため寛永11年に増築されました。上洛殿の中で最

も格の高い上段之間には、襖絵に中国の皇帝の善行を描いた「帝鑑図」のほか、天井画の一部と長押上の壁貼付絵に「山水図」が描かれました。この水墨による山水図こそが最も格式の高い画題です。水墨山水図は線を引く勢い、墨の濃淡などにより描き分けています。輪郭線をしっかりと引く緻密な描写、線を引かず面的に墨をのせる抽象的な表現、それらのちょうど中間のやや粗い筆線というように、大きく3種類に描き分けられました。

13～15 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿天井画 上洛殿二之間 「鯉図」「芦鳥図」「芦雁図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

上洛殿二之間は、上段之間、一之間に次ぐ部屋です。襖絵は文人がたしなむべき芸を主題とする「琴棋書画図」が描かれます。上段之間より格の下がる二之間の天井画には、山水よりも動植物が多く描かれました。水辺に生息する動物は、掛軸や襖絵など様々な形態の絵画に描かれました。中国では、鯉は滝を上ると龍になるとされ、縁起のいい出世魚として好まれました。

16 「波涛図銀象嵌鐙」 江戸時代 7-18 世紀 名古屋城総合事務所蔵

鐙は騎馬の際に足を置くための馬具です。本資料は舌長鐙という種類で、馬上戦でも安全に乗馬できる構造をしています。本資料の舌は約 30 cmあり、足を置くには十分の長さです。銀象嵌で波涛図が施されます。湯殿書院二之間障壁画（出品番号 1・2）のような多層的に重なる波です。裏には流水に紅葉文様があらわされます。銘「加州住吉則作」も銀象嵌です。

17 「波文様火事頭巾」 江戸時代後期 19 世紀 名古屋城総合事務所蔵

火消しが着用する装束や、火事から逃げる際に着用する防護服を火事装束といいます。火事装束には、火除けのために波涛や雨を呼ぶ龍など、水にまつわる意匠が取り入れられました。首周りを覆う鍔には、木綿地に輪郭と飛沫を金糸で刺繍した波文様があらわされています。

18 「赤染衛門馬津の駅舎に宿る図」(『尾張名所図会 前編』巻 1 より) 明治 13 年(1880)刊 名古屋城総合事務所蔵

『尾張名所図会』は、尾張の地理や歴史を紹介した絵入り地誌です。本資料では、古来愛知が豊かな水源を有していたことを紹介し、平安時代中期の女流歌人・赤染衛門（生歿年不詳）が馬津で鶴舟を漕ぐ 2 人の男と遭遇する様子を描きます。川の穏やかな流水が細い線描であらわされています。赤染衛門は尾張国司になった夫・大江匡衡（952～1012）とともに尾張に滞在しました。

19 「檀溪」(『尾張名所図会 前編』巻 5 より) 明治 13 年(1880)刊 名古屋城総合事務所蔵

現在の名古屋市昭和区、川名川の下流に檀溪という溪流がありました。挿絵は少し高い視点から檀溪をとらえ、草木が生い茂り蛇行して流れる溪流を描いています。人里離れた

静かな檀溪は「小仙境」とたとえられ、この清閑な溪谷に数多くの文人が訪れました。挿絵中央の旅人もその1人でしょう。旅人は溪流に架かる橋の上で立ち止まり、上流を眺めています。

**20 「後村上帝篠島に漂着し給ふ図」(尾張名所図会 前編) 卷6より) 明治13年(1880)
刊 名古屋城総合事務所蔵**

篠島は三河湾に浮かぶ離島で、知多半島と渥美半島の間に位置します。南北朝時代、義良親王(後の後村上天皇、1328～68、在位 1339～68?)が悪天候に見舞われ、篠島に漂着しました。挿絵には、親王一行の船が荒波に揺られ、激しい雨に打たれている様子が描かれています。幾重にも引いた雨や雲の線描がその激しさをうかがわせます。

21 「名古屋八景 其一」 後藤林之助画 昭和時代 20世紀 名古屋城振興協会蔵

東から名古屋城をとらえ、前景から順に、二之丸、搦手馬出、天守を描きます。作品名の八景は、中国の瀟湘八景に由来します。瀟湘八景とは、中国・洞庭湖の景色を様々な気候と時間帯で描く画題です。日本でも瀟湘八景図は好んで描かれ、瀟湘八景になぞらえて各地の名勝を描くようになります。本作もそのような八景図のひとつであり、朝の光と名古屋城を描いています。

22 「なごや鯢三題 雪の犬山を望む」 吉田初三郎画 中村浪静堂刊 大正時代 20世紀 名古屋城振興協会蔵

3枚組「なごや鯢三題」の1枚です。天守北側の鯢を大きく描き、背景に木曽川と犬山を描いています。版摺りで着色した上に手彩色で白い絵具を散りばめて雪を表しており、鮮やかな彩色に雪がよく映えます。作者の吉田初三郎(1884～1955)は、数多くの鳥瞰図を手掛けたことで知られ、本作でも実物のような鯢や自然な遠近表現が見事にあらわされています。

23 「御船蔵御構絵図」 江戸時代 19世紀 名古屋城振興協会蔵

尾張藩の御船蔵を記録した絵図です。尾張藩の御船蔵は現在の熱田区白鳥にあり、南北に流れる堀川から西に水を引き入れ、岸に藩の御蔵が立ち並んでいました。御船蔵では輸送された年貢米や藩の船を保管しました。また、船は運送用だけでなく、豪華な屋形船である御座船も御船蔵に保管されていました。